

スカルノとハッタの論争

土 屋 健 治*

The Dispute between Sukarno and Hatta in the early 1930's

by

Kenji TSUCHIYA

はじめに

1930年代初頭のインドネシア民族運動は、インドネシア国民党（PNI=Partai Nasional Indonesia）の分裂と、分裂した両派の間でたたかわされた論争によって開始された。国民党の分裂は1931年中におこり、分裂した両派はそれぞれインドネシア党（Partindo=Partai Indonesia）およびインドネシア国民教育協会（Pendidikan Nasional Indonesia, PNI-baru）に拠って、論争をくりひろげる。これについては、1930年代の民族運動史をまとめたS. プルフィールド¹⁾ および、スカルノの研究者ベルンハルド・ダーム²⁾ が扱っている。また、インドネシアでは、民族運動の通史を書いたプリンゴディグド³⁾、わが国では、増田与⁴⁾ がその概要を紹介している。本稿ではこの論争についてより具体的に、とくにプルフィールドとベルンハルド・ダームが取り扱わなかったこの時期のハッタの諸論文を取り上げて検討してみたい。論争の内容についてなるべく具体的に紹介することが、本稿の意図であるが、この時期（1930年～1934年当時）に定着したスカルノ、サルトノらのインドネシア党と、ハッタ、ジャフリルらの教育協会派の対抗基軸は、独立以降現在に至るまで、インドネシア政治状況の中で一つの重要な対抗要因を形成してきていると言えよう。したがって、本稿は第I節で、論争の背景をなす1930年前後のインドネシア民族運動の状況を概観し、第II節で論争の内容に触れた後、第III節で、結局何が問題とされ、いかなる対抗基軸が設定されることになったのかを、結論的に考察してみたい。

* 東京大学大学院社会学研究科

- 1) J. S. Pluvier. *Overzicht van de Ontwikkeling der Nationalistische Beweging in Indonesië in de jaren 1930 tot 1942*, S.-Gravenhage, Van Hoeve, 1953, pp. 45-52.
- 2) Bernhard Dahm. *SUKARNO and The Struggle for Indonesian Independence*, Cornell Univ. Press, 1969, pp. 127-173.
- 3) A. K. Pringgodigdo. *Sedjarah Pergerakan Rakjat Indonesia* (インドネシア人民運動史), Djakarta, 1950 (6th edition, 1967, pp. 105-110, 137-138).
- 4) 増田 与『インドネシア現代史』中央公論社 1971, pp. 85-88, 97.

I 論争の背景

(1) 人民同盟

1910年代のインドネシア民族運動の主導権を握ったのはイスラム同盟であり、1920年代の民族運動の主導権を握ったのは、はじめイスラム同盟内に胚胎し後にこれと袂別したインドネシア共産党である、と概括できよう。その共産党は1926年、1927年の民族蜂起の後、大弾圧にあって潰滅し、それ以降、いかなる政治組織が再び運動の主導権を握るのかという問題が、20年代末の民族運動内での最大の焦点となった。それは具体的には、プリンゴディグドが指摘しているように、かつてイスラムの旗の下にイスラム同盟に参加し、のち共産党の指導下で人民同盟(Sarekat Rakjat)として組織化されていく民衆を再結集することを意味していた。そのことをプリンゴディグドは次のように要約している。「共産主義諸組織が政庁によって非合法化された後、既存の諸政治組織を拡大する機会、あるいは新しい組織を設立する好機が訪れた。これは、真の共産主義者がいて、地下組織を通じて共産活動を遂行し新たな変化を欲したからではない。そうではなくて、この機会は、人民同盟の一般民衆が新しい指導方針を必要としていたから訪れたものである。これらの民衆は共産党指導者から“小ブルジョワ的立場”に立つものと規定されていた一群の人々であって、その(人民同盟)一部指導者は、共産党に対する阻害者であるとさえ考えられていたのである。⁵⁾」プリンゴディグドはつづけて、この人民同盟の民衆は、本質的には民族主義者左派と呼ぶうるものであって、共産党指導者の逮捕とともに、自らの指導者を失っていたと述べ、ついで、既存の諸民族組織の中で、ブディ・ウトモは、そもそも彼らとは相たずさええず、またイスラム同盟にしても、この民衆を掌握する努力は成果をおさめえなかった、と述べている。⁶⁾

(2) 留学生集団

このような状況下で、新しい政治指導者として登場してくるのは、新エリートと呼ばれている高等教育の修了者、とくにオランダの諸大学に留学していた学生集団であった。すでに1908年に東印度協会と名乗って組織化していたこれら留学生集団は、1920年代、ことに組織名をインドネシア協会(Indonesische Vereeniging)と改名した1922年頃より、「祖国インドネシア」への民族的意識(インドネシア民族としての意識)にめざめつつ、次第に政治活動へ乗り出していった。彼らは本国インドネシアに、1923年頃から「研究会」と称する宣伝組織を作って、西欧諸思想の教授と、民族の統一、解放等を宣伝しはじめた。一方、オランダのインドネシア協会は、タン・マラカやセマウンらの共産党指導者、チプト・マングクスモらの影響と、当時の国際共産主義運動の流れの中で、その左翼的色彩を強めつつあった。

5) A. K. Pringgodigdo, *op. cit.*, pp. 55-56.

6) *Ibid.*, p. 56.

こうした中で、1926年12月5日、ライデンにおいて、いわゆる「ハッタ＝セマウン協定」が成立する。これは、共産党の代表セマウンとインドネシア協会の代表ハッタとの間にとりかわされた協定である。三項目よりなるこの協定の中で、共産党が民族運動の指導権をインドネシア協会に譲渡することがうたわれた。⁷⁾ ここで、インドネシア協会が民族運動の指導権を共産党から継承したことは、当時の協会そのものが共産主義の強い影響下に入っていたことを示すが、一方本節の(1)との関連で言えば、インドネシア協会が「祖国インドネシア」で政治組織として出現する際、その活動の拠点をどこにおくのかを明確にしたものであり、当面、共産党傘下の大衆団体であった人民同盟をその組織化の対象とすることを明らかにしたものであった。

(3) インドネシア国民党の設立

このような背景の中で、1927年7月4日スカルノを党首としてインドネシア国民党が誕生する。この時点で、国民党はスカルノ個人によって設立されたのではなく、(2)で示されたインドネシア協会と、バンドゥン高等工芸学校出身のスカルノらとの合作であり、国民党設立以前の1926年にスカルノによって組織化されたバンドゥン一般研究会 (*Algemeene Studieclub*) は、その研究会という活動形態そのものを、それ以前にオランダ帰りの留学生在がインドネシア各地の都市 (スラバヤ、ソロ、ジョクジャカルタ、スマラン、ポゴール、ジャカルタ) に組織していた研究会に倣ったものであった。1970年8月ジョクジャカルタ市で開かれたインドネシア共和国第二回全国歴史学セミナーでは、国民党創立に参加したスナリオがペーパーを提出して、国民党はバンドゥン一般研究会が発展解消したのではなく、インドネシア協会の完全な指導下で設立されたものであり、一般研究会は国民党とは別の組織としてなお存続していたと述べている。⁸⁾ これは、その後段についてはなお検討の余地があるとはいえ、前段についてみ

7) 協定の内容は次のようなものであった。(Ibid., pp. 50-51)

「インドネシア独立を目指す闘争のために、強固な人民運動が必要であること (さらに、インドネシア民族の力を強化することが要請されている) ことにかんがみて、次の協定がなされた。

第1項 インドネシア協会は、インドネシア民族の人民の党として出現すべきものであって、インドネシア人民の利益のために、政治的社会的分野で活動を行なうことを約束するものである。インドネシア協会は、全体としてインドネシア人民運動の最高の指導権をとり、かつその運動に関して完全な責任を負うものである。社会的分野とは、人民の教育、民族経済、保健衛生、その他人民の民族的な力を高めるのに有益ないっさいの分野をさすものである。

第2項 インドネシア共産党は、第1項で明示されたインドネシア協会の指導権を承認し、インドネシア協会を完全に信頼しなければならない。インドネシア共産党とその傘下にあるすべての組織は、インドネシア協会がインドネシアの独立を達成するための政策を遂行している限りは、インドネシア協会によって指導される民族的な諸運動を決して妨害しないということを約束しなければならない。

第3項 インドネシア共産党の手中に現在まであるすべての出版物は、のちに定められる条件に従って、インドネシア協会に譲渡されなければならない。インドネシア協会は、民族的な機関紙の発行を約束するものである。」

8) Sunario. “*Perhimpunan Indonesia*” dan Peranannya dalam Perjuangan Kemerdekaan Kita (“インドネシア協会”と、独立闘争におけるその役割), (paper), Jogjakarta, 1970, pp. 49-51.

れば、当時の民族運動の状況を的確にとらえたものであると断言できよう。スナリオによれば、7月4日の国民党創立者となったのは全部で9名で、内5名（サルトノ法学士、イスクック法学士、サムシ・サストロウィダグド医師、ブディアルト法学士およびスナリオ法学士）はインドネシア協会出身（すなわちオランダ帰りの留学生）、2名（スカルノ技師とアンワリ技師）はバンドゥン高等工芸学校出身、他の2名の内、スジャディは植民地政庁財政省出身であり、ティラールはジャカルタの銀行員である。⁹⁾ 彼ら9名の他にチプト・マングクスマもこの創立会議に参加したが、彼は、この新組織が政庁から共産党の後身であるとみなされることを懸念して、創立者には加わらなかったという。¹⁰⁾ チプトは、スカルノ出現以前の民族主義左派の最高指導者で、その名声のゆえに共産派からの信頼も厚かった。政庁はこの年末、蜂起との関係で彼を逮捕し、バンダ島へ流刑している。

設立後の国民党は、非協力と大衆行動、これを通じてのインドネシア独立を標榜して民族意識を鼓舞したが、民族統一と民族独立運動の先頭に立ったのは、いうまでもなくスカルノであり、彼は「民族の権力の確立」「権力内の権力」「褐色の戦線」などのスローガンの下に、1927年12月17日には、七つの諸政治組織（国民党、イスラム同盟党、ブディ・ウトモ、パスンダナーズンダ人連合、スマトラ同盟、バタヴィア人連合、ストモの率いるインドネシア研究会）の連合体、インドネシア民族政治団体協議会（PPPKI=Permusyawaratan Perhimpunan² Politik Kebangsaan Indonesia；以下 PPPKI と略称）を設立した。そして、民族的一体感を高揚せしめ、民族独立への熱情をかきたてた。この PPPKI 第1回大会に先立って寄せた論文の中で、スカルノはこの第1回 PPPKI 大会は、きわめて重要な民族的現象であり、これは民族運動史上、新時代（マサ・バル）を画するものであると述べている。¹¹⁾ この「新時代」にスカルノ自身がこめているのは、イスラム的普遍性（イスラム同盟）とマルクス主義的普遍性（共産党）とを民族主義という共通項でとらえ、この共通項に立って、「蘭領東印度の土民」から「インドネシア民族」へと生まれ変わりつつあるこの地の民族が、あそここの地の民族に対抗して、「権力」を確立せんとするその使命感である。従って、「われわれインドネシア民族にとって、闘争とは力の問題・権力の問題¹²⁾」であり「PPPKI が存在するゆえに、こことあそここの間の分裂は明白となり、完全となる。PPPKI の存在にともなって、われわれ有色人の組織の力は蓄積され倍加される。それゆえ、この有色人の戦線はたんに戦線の名前を持つだけでなく、それは本質的に力のある戦線、権力を持つ戦線なのである。¹³⁾」というスカルノの

9) *Ibid.*, p. 51.

10) *Ibid.*, pp. 51-52.

11) Sukarno. *Dibawah Bendera Revolusi* (革命の旗の下に), Vol. I., Djakarta, 1959, (4th edition p. 83).

12) *Ibid.*, p. 84.

13) *Ibid.*, p. 85.

PPPKI への期待が表明されている。この PPPKI は、後に明らかになるように、もっぱらスカルノ個人の構想から生み出されたものである。国民党の設立がインドネシア協会の指導下になされたとしても、国民党の党首について以後のスカルノは、次節でみるようにいわば彼独自の論理で活動していくのである。

(4) スカルノの逮捕と国民党の解散

国民党は設立後3年たらずで活動を停止し4年たらずで解散した。その経緯はほぼ次の通りである。

1929年12月29日、スカルノは他の3名（マンプラジャ、マスクン、スプリアディナタ）の国民党指導者とともに逮捕された。逮捕の理由は、国民党が1930年に反乱を起こそうとし、このためにスカルノらが謀議を行ない、この反乱を煽動したというものであった。¹⁴⁾ しかしこれは国民党弾圧の口実にすぎず、後にスカルノらが有罪判決を下されるのも、具体的証拠のないままに、公共の安寧秩序を乱したというかどによってであった。スカルノらの裁判は1930年8月18日に開かれその判決は1931年4月17日に下された。この法廷でスカルノは、「被告としてではなく、サルトノ、サストロムルヨノ、スユデ、イデ・プラウィディプトラら4人の弁護士を後援に、3世紀にわたるオランダ植民地主義犯罪の告発の闘士として法廷にのぞみ、その名を一世に高めた。¹⁵⁾」この法廷陳述はのち『インドネシアは告発する』として刊行されている。

ところで、スカルノらの逮捕に直面して、逮捕を免がれた国民党指導部はサルトノ指導下で緊急党大会を開き、党員に対して党活動の停止を命ずるとともに、国民党の対処の仕方について協議した。サルトノの伝記を記したアラムジャはその間の事情を次のように述べている。

「……緊急党大会で、国民党を存続させていくか、解散するかをめぐって討論された。二つの見解が大会参加者の間にあった。第1の見解は、国民党の解散に反対するものであり、もうひとつは党の解散を必要だと考えるものであった。後者によれば、政庁の告訴は、国民党がすでに非合法化された共産党の後身であるとの告発にほかならないということであった。サルトノを中心にしたグループはこの見解であった。そしてこれは多くの支持者を集め、国民党がひきつづき存続すれば、党の全指導者と党員とは、ポーヘン・ディグール（西イリアンの流刑地。共産党、人民同盟の指導者が流刑された。）に送られてしまうであろうと考えられるようになった。これに対して他の派は、国民党が告訴されただけで、現実には非合法化されていないにもかかわらずこれを解散することは誤りであると主張した。男らしく闘争し、勇気をもってこの難局を引き受けなければならない、およそ無意味な犠牲などというものはありえないのだ、と彼らは主張した。こうして、スカルノらが拘留されている間に、両派の見解は対立を続け、ついに、党の存続を主張する派は評決に敗れた。同時に、新党の設立が決定され、インドネシア党が生み出されたのである¹⁶⁾。」

14) 裁判では、国民党と共産党およびインドネシア協会との組織的つながりが追求されたという。(Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 125).

15) 増田 与, *op. cit.*, p. 85.

16) St. Rais Alamsjah. *10 Orang Indonesia Terbesar Sekarang* (今日もっとも偉大な10人のインドネシア人), Djakarta, 1952, p. 158.

ところで、この国民党解散が国民党への政府の禁令に一週間ほど先立っていたことから、この解散をめぐって旧国民党内に分裂がはじまる。サルトノらの新党設立（インドネシア党＝Partai Indonesia, 1931年4月30日設立）に反対するグループは、各地に独自の研究会を設けて活動を続行し、この新党に加入せず、ジャカルタのインドネシア民族研究会を中心に研究会を組織して、自由派連合（Golongan Merdeka, サルトノの指導から自由という意味¹⁷⁾）と名乗りインドネシア党に対抗した。そしてオランダにいるハッタらの帰還を待ち望むことになった。ハッタはオランダにあって、国民党解散の報を聞くや、1931年7月にインドネシアの各新聞に書簡を送ってサルトノらの措置を非難し¹⁸⁾、ひきつづきオランダからインドネシア党批判の論文を自由派連合の機関紙「人民主権」（Daulat Rakjat）に掲載せしめていたからである。こうして、自由派連合は、1931年12月末、ジョクジャカルタで大会を開き新しい組織インドネシア民族教育協会（Pendidikan Nasional Indonesia）を設立し、その議長にはシャフリルが就任した。シャフリルは、1929年よりオランダにあってインドネシア協会で活動し、1931年夏に帰国して以来¹⁹⁾、自由派連合の論客として頭角を現わしていた。この新組織設立の提唱者もシャフリルであったという。²⁰⁾ 彼らはその組織名の略号 PNI に「新＝baru」をつけて、PNI-baru と名乗った。スカルノが植民地政庁総督デ・グラーフ帰国の際の恩赦により、4年の刑を2年に縮減されてバンドンのスカミスキン監獄を出所したのは、その数日後1931年12月31日のことである。

(5) 国民党の分裂と両派の論争

ここに、民族運動の主流の座にあった国民党はインドネシア党と教育協会の二派に分裂した。両派ともに基本綱領にインドネシア独立の達成と非協力を掲げ、国民党の綱領をそのまま継承していたが、教育協会は特に中核を養成するための教育訓練を重視していた。当時の民族運動の中では、ブディ・ウトモ、イスラム同盟党、諸地方組織ともに協調政策を掲げており、かつてのイスラム同盟と共産党に担われていた強力な反政庁抵抗運動を継承しようとした国民党のこのような分裂は、1930年代の民族運動の暗い幕開けを告げるものであった。出獄後のスカルノは、民衆の熱狂的な歓呼に迎えられたが、その彼を待っていたのはこのような国民党の分裂であり、彼はただちに両派の合体に努力する。ベルンハルド・ダームによれば、スカルノは、1932年初頭、スラバヤで行なわれた PPPKI 主催の「インドネシア・ラヤ大会」で、6,000人の聴衆を前に演説し、彼の逮捕投獄にもかかわらず独立運動がさらに高揚しつつあることをよ

17) A. K. Pringgodigdo, *op. cit.*, p. 105.

18) Bernhard Dahm, *op. cit.* p. 129.

19) シャフリルの帰国時については、1931年春（F.フィース）、夏（ダーム）、32年（アラムジャ）といわれるが、ここではダームに従う。（Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 135）.

20) *Ensiklopedia Indonesia*, p. 1072.

るこぶとともに、両派の分裂に触れ、自らをワヤン物語中のコクロソノになぞらえ、王位を篡奪されたマンドゥラ王国のその正当な後継者コクロソノが、神から授かった武器ナンガラ（ナンゴロ）を用いて王位を回復するが後に二人のわが子が相争うのをみて悲嘆にくれたというひそみにならって、この両派の誤解を解くため、ナンガラを再び用いて相争うわが子を団結させたい、と述べたという。²¹⁾

しかし、教育協会派の批判はサルトノの国民党解散という措置から、次第に直接スカルノの統一論、組織論に向けられ、第II節でみるように、スカルノとハッタ、ジャフリルらとの基本的な対立点をあらわしていくものである。その限りで、スカルノが、出獄後に直面したのは、「わが子同志の争い」ではなく、スカルノ自身と彼の対抗勢力間の争いだったのであり、彼自身は1932年8月1日にインドネシア党へ入党している。

一方、オランダにおいて、帰国後に政治活動を行なう場所はインドネシア党ではありえないことを宣言していたハッタは、1932年8月23日帰国²²⁾してのち、ただちに教育協会に参加し、ジャフリルに代わってその議長となった。それ以後、論争はスカルノのインドネシア党とハッタの教育協会派の論争として展開され、それは、党組織の問題、PPPKIをめぐる統一論の問題、非協力政策の問題におよんでいった。

30年代、オランダの植民地政策は世紀初頭以来の倫理政策を放棄し民族運動に対してはもっぱら高圧的な対処をした。この傾向は、1931年9月12日にデ・ヨンヘが植民地政庁総督に就任して以来ことに顕著となり、政庁と正面から対決する非協力派（インドネシア党、教育協会、インドネシアイスラム同盟党および西スマトラのペルミ²³⁾）に対しては、集会の制限、臨検や指導者の逮捕流刑で臨んだ。インドネシア党についてみれば1933年8月1日、集会禁止令とともにスカルノ、ハミド・ルビス、ブユン・シレガルが逮捕され、スカルノはフローレス島のエンデ（1934年～38年）とスマトラのベンクルー（1938年～42年）に流刑されている。また教育協会のハッタ、ジャフリル、ボンダン、ブルハヌディンらも1934年2月26日に逮捕され、はじめは西イリアンのタナ・メラ、1936年以降はバンダ島（バンダネィラ）に流刑された。インドネシア党は、スカルノの再逮捕の後1934年12月1日には非協力政策の放棄を宣言、次いで35年2月9日にはPPPKIより脱退し、36年11月18日には党組織を解散して、それは後、37年7月

21) Bernhard Dahm, *op. cit.*, pp. 133-135.

22) ハッタの帰国日はプルフィールに従った。J. S. Pluvier, *op. cit.*, p. 51.

23) ペルミ（Permi : Persatuan Muslimin Indonesia, インドネシアモスLEM統一協会）は、インドネシアイスラム同盟党（イスラム同盟の後身）の西スマトラ、ミナンカバウ支部として1930年に成立した。1932年以降非協調主義を唱えて、30年代のインドネシア・イスラム運動の中で、もっともラディカルな反政庁抵抗運動を行ない、34年には、その指導者、イリヤス・ヤコブ、ジャラルディン・タイブらが西イリアンに流刑され、37年解散された。（J. S. Pluvier, *op. cit.*, pp. 76-77）。

ペルミは、30年代初頭、インドネシア党の強い影響を受けており、1932年には、インドネシア党指導者の一人、M. ヤミン（西スマトラ出身）が、ガトット・マンクプラジャとともに西スマトラを訪れ、ペルミと同盟関係を結んでいる。（Alamsjah, *op. cit.*, pp. 159-160）。

24日に設立されたインドネシア人民運動党（Gerindo=Gerakan Rakjat Indonesia）へ継承されていった。教育協会もハッタらの逮捕の後、組織再建に努めたが1936年中には再建指導部が逮捕流刑され、若干の地方支部の活動下でその命脈を保っていたとはいえ、組織名だけが残されていてその実態はほとんど自然消滅の道をたどっていった。党勢をみると、インドネシア党が33年当時71支部（24支部候補を含む）約20,000党员を擁したのに対し、教育協会は、32年当時約2,000名にすぎなかった。²⁴⁾

II 論争の内容

第I節でみたように、民族主義左派の両派の論争は、1931年より1934年にかけて展開されるが、その論争点は次の4点にまとめられる。第1点は国民党の解散をめぐる論争、第2点は統一問題をめぐる論争、第3点は党組織をめぐる論争、第4点は非協力政策をめぐる論争である。これら4点に関して、この時期の両派の機関誌に掲載され後に集成されたスカルノ、ハッタ、シャフリルのいくつかの論文を手掛かりにして、以下これを紹介してみたい。

(1) 国民党の解散をめぐる

第I節で述べたようにサルトノの指導下で国民党が解散され新党インドネシア党が設立されたことに対し、旧国民党のうちこの方針をこころよしとしない一派は自由派連合を結成してインドネシア党中央を批判したが、これに呼応しかつこの自由派を積極的に支持したのは、1922年以来オランダにあって1926年以降はインドネシア協会の議長の任にあったハッタであった。

ハッタは、1930年4月10日付の国民党機関紙『統一インドネシア』に「試練に立つ国民党」という論文を寄せている。その中でハッタは、われわれの指導者スカルノらは、政庁による逮捕に屈することなく、よくその試練に耐えて闘争を続けていくであろうと述べ、また、逮捕を免れた国民党の指導者に対しては、失望、恐怖することなく、さらに活動を強化し前進するよう訴え、われわれの党（国民党）こそは民族の精神そのものであることを強調している。²⁵⁾ その約1年後国民党解散の報に接したハッタは、1931年7月、オランダから書簡を送ってこれを非難した。それに対し、インドネシアから遠く離れたオランダにあって、事情に疎いハッタの批判は当を得ていないとの反論²⁶⁾が出、これにこたえて、彼は再批判をこころみている。これは自由派連合系の機関紙『人民主権』に、1931年9月30日に掲載された。ハッタは次のように述べている。すなわち、国民党の解散によって二つの重要な問題点が生じた。ひとつは、党幹部が自らを縛りつけ党を存続させていく権利を放棄してしまったことである。党幹部ははまだ

24) A. K. Pringgodigdo, *op. cit.*, pp. 105-110,
St. Rais Alamsjah, *op. cit.*, p. 20, 39.

25) Mohammad Hatta, *Kumpulan Karangan* (論文集), Vol. I, Balai Pustaka, 1959, pp. 211-212.

26) *Ibid.*, p. 97.

政庁による党解散令の下されない内に、最善を尽くす勇気をもたずに夜逃げ同然の事を行なったのである。(32年1月30日付の主張では、ハッタはこのような、自らハラキリを行なうような政党は、世界史上に例のないことだときめつけている。²⁷⁾一部の指導者が逮捕されれば、さらに意志強固な指導者が立ち上がって活動を続行すべきである。現在の状態をみていると、このような堅忍不拔の指導者を育成することの必要性がさらに痛感される。そのような指導者が生まれ出てこそ、スカルノのいう“1人の指導者が倒れても10人の指導者があらわれはじめて、国民党を引き継ぎこれを前進させていくであろう。”という言葉が意味をもってくるのである。²⁸⁾

国民党解散をめぐる他の重要な問題点は、党解散が何千もの党員の協議を経ることなくして決定されたことである、とハッタは述べる。スカルノ的な党組織の批判をも含意しているこの第2点をそのまま引用すると、

「……(このような党解散の方法は)民主主義的であろうか。民主主義的であるか否かは独立運動の根本的原則にかかわることがらである。独立運動においては、人民こそが党の魂である。人民は、党の意義を自覚し、また、党が人民の血肉であることを確信するように教育されねばならない。党の生死は、人民の生死として感得されるべきである。かくしてはじめて、人民が自らの権利を自覚する運動において有意義な条件が達成されるのである。

しかるに現実はどうであろうか。1930年1月より、(国民)党幹部は、人民に対して沈黙と非行動とを命じた覚書を発している。その他にも、党のいっさいの重要事項は、指導者の思うがままに取り決められている。党の運命を決するマタラム(ジョクジャカルタ)、ジャカルタでの大会、これらすべてが党員との協議なしに行なわれ、全支部党員の協議を経ずに行なわれた。かくして行なわれた会議を有効であると言いうるであろうか。

“民主主義”という言葉は、われわれの指導者が口ぐせにしているものである。しかしそれは現実にはみられない。人民はまるで足の汚れを拭うごさのように考えられている。演説に秀でた指導者の演説を聞いて、拍手喝采せよと命ぜられるためにのみ必要なものぐらいに考えられている。人民が自らの責任を担うことは教えられていない。もしも、あそこの輩(オランダ人)が、われわれの人民についてまだ未熟だと言えれば、われわれは怒るだろう。しかるに、党員である人民との協議をあらかじめもつことなしに国民党を解散せしめた指導部の態度は、自ら、人民がいまだ未熟であるとみなしていることにほかならない。国民党の解散が、国民党同調者の一部分から承認されなかったとしても、それはおどろくべきことでもない。……²⁹⁾」(下線 引用者)

第I節でみたように、ハッタはこの論文の中で、さらに続けて、帰国後政治活動を行なうのは、インドネシア党の枠外であると述べている。傍線部に示されるように、ハッタが基本的な問題としていることは、国民党の正統性に対するインドネシア党の不当性、すなわちインドネシア党は国民党の正統な後継者ではないということであろう。国民党の解散をめぐる、ハッタと同じ立場から批判し帰国後自由派連合の中心にあったシャフリルの主張をみるとこの点が

27) *Ibid.*, p. 103.

28) *Ibid.*, pp. 98-99.

29) *Ibid.*, p. 99.

さらに明確にされている。シャフリルも、国民党が大衆行動と非協力政策とを掲げた真の大衆政党であったことを先ず前提として、党内闘争に触れてつぎのように述べている。すなわち、一般的に党内において左派が強くなると右派は権力を用いてその地位を保持しようとする。この両派が、現実はその思想と原則、目標を異にするようになれば、党の分裂はもはや必然的なことになる。そして右派は、左派（左派こそが新しい任務を担い、未来に対応しようとする）を抑圧して、反動化していく。³⁰⁾

さらに、具体的に国民党解散とインドネシア党設立に関しては次のように述べている。

「……筆者は、さきの国民党解散は、その戦術的誤謬にすぎないとは考えない。これは（1930年以降、国民党がその活動を停止したという）誤った立場からとられた措置である。……国民党指導者が外的な圧力に屈し（その活動を停止した時）、彼らはすでに党の原則と戦略とが定めている路線に従わなくなったのであり、それ以降、指導者は人民の力（*kodrat*）を物質化しえず、責任もひきうけず、人民を信ぜず、一貫して日和見政策に目をむけ、こうして、国民党は人民から離れ、大衆から遠ざかっていき始めた。……国民党の解散はこのようなそれ以前の誤った措置からひきおこされてきたその論理的帰結であった。……国民党の民主主義的精神に沿って行なわれたのではなく、国民党の原則、戦略に沿ったものでもない国民党の解散は、国民党によって行なわれたものではない。（下線 シャフリル）その国民党指導者がいう、“万やむをえず”（“*overmacht*”）という言葉は、党自身の“無能力”（“*onmacht*”）を語る以外の何ものでもない。……一方人民大衆は、別の目標を持っており、それは国民党の解散とともに、……かつての原則と精神に回帰した。こうしてみると、いま新聞紙上で発せられている、“インドネシア党は、国民党の後継者ではないのか”という質問はすでに答えられたことになる。現在インドネシア党にいるすべての者が、もと国民党の党员であったとしても、インドネシア党は……国民党ではない。インドネシア党が、かつての目標や闘争綱目を掲げることはさしつかえない。しかし、その精神とその誓約とは、国民党のそれとは別のものである。かくして、インドネシア党は、国民党が目指していた目標とは別の地点に、到達することになるであろう。……

国民党の分裂は、党の原則が誤っていたからではない。いまなお、何千もの人々が国民党の原則を信奉している。そして彼らはすべて、国民党によって選び取られたのは、早急に独立を達成することのみであったと信じている。元国民党党员で、人民主権派（自由派連合）に結集した人々は、人民主権派が国民党の遺産の継承をひきうけること、そして、国民党の政策をおそらくより徹底的に強力に遂行していくであろうということを確認している。彼らは、いま、大衆行動と非協力の条件を内包した原則的精神を所有している政党は無いことを確信し、それゆえ、彼らが合体していくべき政党も無いことを確信している。この観点から見れば、分裂したのは彼らではなく、もとの原則を放棄した国民党の一部分であったということになる。彼らは、一貫してその立場を堅持した。彼らは、インドネシア党に結集した部分によって、（もとの立場に）とり残されたのである……³¹⁾

国民党解散をめぐるハッタとシャフリルの批判は、ともに国民党を民族運動のまったく正当な後継者であるとしながら、その国民党の解散についてそれが国民党の精神からの逸脱であると難ずるわけである。それが、自由派連合の正統性を主張する根拠となる。その際、とくにハ

30) Sutan Sjahrir, *Pikiran dan Perjuangan* (思想と闘争), Djakarta, 1947, pp. 21-22.

シャフリルが1931年から34年にかけて「人民主権」紙に掲載した論文がこの『思想と闘争』中に収められているが、日付がつけられていないので、執筆時期は明らかにしえない。

31) *Ibid.*, pp. 9-10, 12.

ハッタが国民党指導部の非民主性を批判するのは、たんにサルトノ派のみへの批判ではなくその時点で、捕われの身としていわば、「悲劇のヒーロー」になりつつあるスカルノへの考慮を払いつつも、実はスカルノ的党活動、党組織への批判であり論争の第2点以下では、それが明確化してくる。

(2) 統一問題をめぐって（いわゆる *Persatéan* 論争）

1931年末に出獄したスカルノは、インドネシア党と教育協会の統一に努めたが成功せず、1932年夏「ブン・カルノよりマルハエンの徒への通告」と題する宣言文を草して、インドネシア党へ入党した。その宣言文の中においてもスカルノは、インドネシア党と教育協会の間には基本的な相違点はなく両者はともにマルハエンの党であると述べている³²⁾が、そのマルハエン（後述）の党としての正統性こそが、両派の間の論争点となる。ハッタが統一問題に触れて主張したことも、それによって、教育協会派（自由派連合）の「マルハエン性」を強調せんとしたからにほかならない。その後、ハッタらの批判の矢は、国民党の基本的精神であったマルハエン的性格を損なうような統一のあり方、具体的には PPPKI に対して向けられた。

1932年4月20日付の「人民主権」紙にハッタは一文を寄せ、自由派連合の出現によって統一が乱されているという非難に応えて、彼の PPPKI=*Persatéan* 見解を披瀝した。いわく、「世上統一 (*Persatuan*) と呼ばれているものは、ほんとうは、串焼き肉の統一 (*Per-saté-an*, *saté* は串焼き肉の意) にほかならない。つまり、山羊や牛や水牛の肉が串にさされて一つになっているのである。しかるに、人民の観念とブルジョワや貴族の観念とは、そもそも統一しえないものである。これらすべての集団を統一することは、各々がその各々の原則を犠牲にすることにほかならない。³³⁾」ハッタはさらに彼の統一論を展開する。すなわち、ハッタらの望む統一とは、PPPKI 内部の人々が保持する串焼き肉の統一とは別のものである。統一とは民族的な統一、もはや分割されえないインドネシア民族の統一であり、この統一された民族内では、様々な見解を抱く思想潮流は各自の原則に沿った活動を行なう機会を得るべきであって、「統一」の世迷い言によってその活動の喉元をしめあげられてしまう道理はない。統一戦線とは、危機的状況に直面した時にはじめて問題とされるものである。めざすべき統一は PPPKI の「統一」派とはまったく別のものである。PPPKI 内では、非協力派にとって聞くも不愉快な政庁讃美が公然と語られ、しかも彼ら（例えばタムリン）は、国民参議院等の植民地諸機関に固執しつづけている。PPPKI のこのような状態が、PPPKI 内での協力派民族主義者の地位を強化させ、PPPKI を、国民党に結集した人民の心からますます遠いものとさせていったのである。PPPKI の政庁協力派に率いられて行なわれたスラバヤのインドネシア・ラヤ大会

32) Sukarno, *op. cit.*, p. 169.

33) M. Hatta, *op. cit.*, p. 153.

(1932年1月)は、そのことを明瞭に示している。³⁴⁾

ハッタの統一批判論は、ほとんど同じ観点からジャフリルによってもなされている。彼は1932年に次のように言っている。

統一とは、運動の目標ではなく闘争の戦線を強化するための一つの条件にすぎない。³⁵⁾ インドネシア民族運動史をふりかえってみると、何らかの統一が行なわれた例は五つ数えられるが³⁶⁾、このうち、1918年の急進派連合以外は、いずれも運動が困難な時期に出現した。しかしこれらはいずれもその統一の内部では仲間への配慮が先立ってあいまいな態度しかとられえず、あえて批判を行なう者は、ただちに分裂主義者、裏切り者と呼ばれた。困難な時期には確かに民族的感情は統一を求めるが、現在は相対的にみれば、その困難な時期(統一が要請されるような危機的状況)は過ぎ去っており、各党はその党原則にのっとなって、各々の党活動を遂行しうる。この時点でなお統一を叫ぶのは、現実政治の冷静な認識とは別の、たんなる感情に基づくものであって、それはもはや詩人の領分に属することである。³⁷⁾ PPPKI についてみれば、それは二つの形態、すなわち、たまたま同一目標(自治、議会開設要求)を持つ者が一定期間統一した急進派連合の統一の形態と、相互に相対立する目標を持っている組織が、各組織の自主性を損なわない範囲で、民族統一のために協同した東インド民族会議の統一形態とを混合させたものであり、そこに生まれ出たのは、両性具有の子供 (anak bantji)であった。1928年に Sn 氏(スカルノを指す)は、“一体となりたい願望”が PPPKI を生み出したと述べているが、これは感情であって政治的な意味をもたない。³⁸⁾ ここでは“博愛”(persaudaraan)が神秘化(クラマツト)されざるをえない。³⁹⁾ こうして、国民党の原則である非協力と大衆行動とは、この PPPKI 内部では放棄されざるをえず、結果的には、PPPKI は国民党に結集した人民を貴族派に結合させることになったのである。PPPKI の「統一」が、国民党の原則を逸脱させたことは明らかである。とりわけ、スラバヤのインドネシア・ラヤ大会は、民族独立闘争を貴族階級の手任せようとするものにほかならない。⁴⁰⁾ 国民党のいう大衆行動とは、マルハエンを教育することであり、人民に担うべきその任務を覚醒せしめる啓蒙政策 (politik Aufklärung) のことである。⁴¹⁾

34) *Ibid.*, pp. 153-154.

35) S. Sjahrir, *op. cit.*, p. 22.

36) *Ibid.*, p. 34.

ジャフリルは、統一戦線の例として、急進派連合 (Radicale Concentratie, 1918年)、全東インド会議 (All Indische Congres, 1923年)、東インド民族会議 (National Indisch Congres, 1924年)、PPPKI (1927年)、大インドネシア会議 (Congres Indonesia Raja, 1932年) の五つをあげている。

37) *Ibid.*, pp. 35-39.

38) *Ibid.*, pp. 39-40.

39) *Ibid.*, p. 41.

40) *Ibid.*, p. 40, 42, 44.

41) *Ibid.*, p. 43.

ハッタとジャフリルにとって、統一とはあえて問題にされるべきものではなく、それはいわば前提として与えられているものなのである。しかし、オランダに対するインドネシア民族の統一というハッタらの統一の理解は、「蘭領印度の土民」から「インドネシア民族」へとなり変わっていくことの困難さを素通りして、統一の問題がもっぱら統一戦線論の問題としてのみ論ぜられるという結果をうみ出した。ハッタとジャフリルが「悪質な」(djelék)と評したスラバヤのインドネシア・ラヤ大会を、出獄後最初のそして最高の政治舞台としたスカルノにとって、PPPKIは、依然として「私の生命の一部⁴²⁾」であったのである。民族内部の階級的矛盾をもっぱら重視するのか、あるいはオランダ対インドネシアという民族矛盾を第一義とするのかという問題に、この統一論はつながっていくが、それについては第Ⅲ節で検討する。

(3) 党組織をめぐる

ハッタらは、国民党解散の際にみられた党指導者の専横的な行動は党の民主制を損なうものであり、党につき従う民衆を愚弄し、結局党活動そのものを弱体化することになると主張した。1932年1月30日の論評で、ハッタはインドネシア党のいう原則とは、党員に対する検閲制度にほかならず、党指導部には強大な権限が与えられ、党の同調者はそれに「あひるの追従」(membébék, あひるが一行になつてガーガー声をそろえて先頭のものに従うという意味)をするのみである⁴³⁾、と述べている。

1933年の10月と11月にハッタは「弾圧下の運動」および「党の自律性と集中性」という二論文を寄せて、教育協会の活動方針を次のように述べている。

教育協会があえて党(Partai)と名乗らないのは、この組織が量ではなく質の闘いを欲したからである。それは強靱な幹部養成を主眼とし、集会よりも党員訓練に重点をおき宣伝(agitasi)を第一目的とはしない。今日のような困難な状況下(この年8月スカルノら逮捕)では、各支部組織、組織員の責任感と主体性が要請されるからである。各支部がその責任を遂行しうるか否かは支部組織の質にかかわってくる問題であつて、上意下達の集中性では組織は存続しえない。逆に各支部が闘争の原則で中央と一致しながら、各局面では自律性を持ち、その判断に基づいて行動していけば組織は存続発展していく。⁴⁴⁾

11月10日付の論評でもハッタは、組織の重要性に触れて次のように述べている。

展望のない感情だけで運動を推進させようとするのは、子供じみたやり方である。ひとたび統一の感情が芽生え発展し、民族統一が実体化した以上、運動も示威行動の段階から組織化の段階に入るのである。⁴⁵⁾

42) Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 138.

43) M. Hatta, *op. cit.*, pp. 104-105.

44) *Ibid.*, pp. 173-175.

45) *Ibid.*, p. 177.

さらにハッタはこの論争の中で、同年夏逮捕されたスカルノが獄中でインドネシア党から離党する声明を出したことに對し、運動の“頭目”とみなされていた指導者が組織から退いたが、これは人民に対する責任ある態度と言えようか、このような気ままな態度こそ人民の運命をもて遊んだものではないのかと批判している。⁴⁶⁾

すでに述べたように、インドネシア党がその活動の重点を大衆集会、宣伝活動においていたのに対して、教育協会は、将来独立闘争の中核となりうるような幹部を養成することに重点をおいていたわけであり、もっぱら指導者の個人的資質（具体的にはスカルノ）にのみ依存している民族運動を批判していったのである。

シャフリルは、西洋と東洋とを比較し、西洋が東洋にまさるのは組織と技術の2点であると指摘し、とくに資本主義の時代が組織化の時代であり、組織のみが組織に對抗しうることを強調している。⁴⁷⁾ シャフリルによれば、組織だけが独立獲得のための武器であり、反資本主義、反帝国主義闘争に立ち上がる人民の武器となる。組織のためには、モラル（このモラルは、神秘的非合理的なものであってはならない。）が必要であるといえ、それは組織の前提にほかならない。組織の強化とは組織内の各部分を強化し、部分と全体の関係を円滑ならしめることを言う。このために必要なのは、勇気ではなく確実に持続する意志である。教育だけがこのような強固な意志を育てることができる。⁴⁸⁾

ハッタ、シャフリルが、党組織にふれつつ「感情」「モラル」「勇気」よりも「組織化」「意志」「自律性」を重視したのは、直接にスカルノを意識していたからであるが、そのスカルノは1933年3月に執筆した「インドネシア独立の達成のために」という論文中、前衛党における集中性の問題にふれて、ハッタらの論を退けている。そのまま引用すると次のようになる。

「……改良主義に傾く黨員、改良主義に傾く思想、これらは徹底的に“洗い落とされ”なければならない。もし“洗い落とし”えない時には、容赦なく無慈悲に党内から追放しなければならない。

諸君は反問するだろう。もしそうなれば、党内民主主義はなくなってしまうと。当然のことだ！“あらゆる思想は自由で良い”という意味で、党は民主的であってはならない。いっさいの“主義”が許容されるような民主的性格を持つてはならない。党はただひとつの思想と主義のみにかかっている。100パーセントラディカルな思想と主義がそれである。前衛党内で許容される民主主義は通常の民主主義ではない。前衛党の民主主義は外国語で民主集中制と呼ばれている民主主義である。これはその指導者に対して、逸脱分子を罰し大衆と党との関係を危険にさらすような黨員ないし党派を追放する権限を与える民主主義である。“党内に無制限な思想の自由が存在してはならない。党を統一する柱は信念の統一の内に存する”。これは党組織について、ある大指導者が語ったきわめて注目すべき教えである。分裂分子を許してはならない。分裂分子はもっとも痛烈に弾劾するかただちに蹴り出してしまわなければならない。なぜならば党内がゆれ動き動揺している前衛党は、大衆の前衛とはなりえないからである。

46) *Ibid.*, p. 177.

47) S. Sjahrir, *op. cit.*, pp. 55-56.

48) *Ibid.*, pp. 55-62.

改良主義への逸脱を罰するだけではない。アナルコ・サンディカリズム、無定見な狂躁、盲目的行動や思想への逸脱、これらもまた正されなければならない。制裁されなければならない。このような逸脱こそ、党に“左翼性”が欠けていると称しては、“裏切り者”呼ばわりするものである。この逸脱こそはその盲目性のゆえに、ラディカルな左翼性と、非社会的な左翼性との区別を知りえないものなのである。自然を担い、自然に担われた左翼性と、無展望な怒りの情のみを担い、それに担われた左翼性とを弁別しえないのである。健全な党はたえずこの二重の逸脱を明確にしていかなければならない。独立の大海をめざしてうねりうねりゆく大衆行動の大波を確信する、そのラディカルな道すじを指し示すためにである。

それゆえに、前衛党としての条件の一つは、原則である。鋼鉄のように強い原則、あえて異を立てようとする党員を容赦なく無慈悲に罰する原則、この原則こそ前衛党の一つの魂である。ラディカリズムのそのイデオロギーに関する原則のみでなく、またラディカリズムのその“理論的側面”に関する原則のみではない。党の全側面に関する原則なのである。理論原則、組織原則、戦術原則、宣伝原則——要言すれば、その全条項の末端まで、党は一つの機械装置メカニズムのように車軸も機械も完璧な一つの原理につらぬかれていなければならない。

ここにおいて党は精神のない、また変化もない機械であってもならない。そのような党は生命のない党であって、時代の強風はたちまちそれをこの地上から吹き飛ばしてしまうであろう。自然を担い、自然に担われている党は、自然そのもののように生き、自然そのもののように進化していかなければならない。党の生命、党の進化、党の生命の歩み、これらは阻止され挑戦されてはならない。阻止され挑戦されるべきは、党の病、党のラディカリズムの身体を蝕む逸脱の病である。自然そのものは、かつて自らわき道にそれることもなく、たえずさまざまな病と闘ってきている。党は、党のラディカリズムの身体をより頑丈により健康にしてくれるものは、よろこんでこれを受け入れなければならないが、病に対しては、ただちに、容赦なく“きびしく”投薬しなければならない。党の心臓部にあるべき集中主義は、独裁者の集中主義ではなく、党そのものが最高指導者となるような民主的な集中主義でなければならない。しかし逆にまた、党の心臓部にあるべき集中主義は、何に対しても自由を与える民主主義ではなくて、ラディカリズムを蝕む病を明らかにする集中的民主主義でなければならない。

民主的集中主義と集中主義的民主主義——これこそが、前衛党の内的な条件である。……」⁴⁹⁾

(4) 非協力政策をめぐる

非協力 (non-cooperasi) とは、具体的には、植民地政庁との妥協を排し、政庁の官吏になることを拒否し、植民地に存在する種々の会議 (国民参議院、諮問委員会) をボイコットすることである。インドネシア協会は、すでに1922年の活動綱領中にこの非協力の立場に立つことを宣言し、のちこれは1927年に国民党が設立された際に党の基本綱領となった。1930年代初頭に、この非協力政策をめぐる両派が論争し、それが党の原則論、戦術論をめぐる論争に発展したが、この論争の契機となったのは、1932年11月にハッタがオランダ独立社会党 (Onafhankelijk Socialistisch Partij) の推薦で、オランダ国会第二院の候補者になることを承認したことであった。12月10日インドネシア党は、機関紙「統一インドネシア」で、ハッタはいまやその正体を暴露した、われわれはハッタを警戒しなければならない⁵⁰⁾、という趣旨の批判をした。

49) Sukarno, *op. cit.*, pp. 305-307.

50) Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 159.

この問題に関するハッタ、シャフリルとスカルノの見解の中には、両者の基本的な視点の相違がもっとも明確に示されている。

スカルノは、1932年中の論文「再び、社会民族主義と社会民主主義について」の中で、非協力が闘争原則であることをくり返し強調している。

「非協力とは、インドネシア独立を達成するためのわれわれの闘争原則である。インドネシア独立を追求する闘争の中で、われわれはつねに、あそことここの間、植民地支配者と植民地被支配者の間、支配者と被支配者の間に利害対立が存在することを、想起しつづけなければならない。いうまでもなくこの利害対立こそが、われわれをして非協力の立場をとらしめるその理由なのである。いうまでもなくこの利害対立こそが、もしわれわれが非協力政策をとらないならば、インドネシアの独立は決して達成されないという確信を、われわれに与えてくれるのである。いうまでもなくこの利害対立こそが、たとえば、権力形成、大衆行動、その他の闘争諸原則の大部分を規定するものなのである。

それゆえに、非協力とはたんに“支配者の会議には列席しない”という闘争原則にのみとどまらない。非協力とは、ひとつの積極的な原理であり、支配者とはあらゆる政治的分野で協力せず、非和協的な闘争を遂行しようとするものであって、支配者との無慈悲な闘争のことである。非協力は、会議の壁の内にとどまるものではなく、われわれの闘争原則の全分野をおおうものである。これこそが、非協力政策がラディカリズムの内容をもち、ラディカリズムを包含しているというその理由である。——ラディカリズムとは、心のラディカリズム、思想のラディカリズム、行動のラディカリズム、すべての内的外的なラディカリズムのことである。非協力は、ラディカルな活動を要請する。

われわれの非協力にもとづく一側面は、支配者の諸議会に加わらないということである。さて、オランダ第二院も、この支配者の諸議会に含まれるか。オランダ第二院は、この支配者の諸議会に含まれる。なぜならば、この第二院とは、われわれにとって、植民者オランダのひとつの“イルミネーション”、ひとつの“肉体”、ひとつの“化身”であり、われわれに足枷をはめて、われわれから独立を奪っている権力のその“化身”だからである。第二院こそ、植民地本国オランダの“シンボル”であり、われわれを抑圧し、われわれを悲惨な民族たらしめている状況の“シンボル”だからである。

それゆえ、われわれの非協力政策は、原則として、一般的にはオランダ議会、ことに、第二院を対象としなければならない。われわれとその他のアジア諸民族に足枷をはめている、民族連合などのような制度の“イルミネーション”をその対象としなければならないのである。

それではこれは無政府主義ではないのか。第二院はひとつの議会ではないのか。もちろん第二院は議会である。しかし第二院はオランダの議会なのである。もしわれわれがすべての議会制度を否定するなら、もちろんわれわれは無政府主義者である。もしわれわれが、（注意せよ！）ただ独立したインドネシアにのみ存在しうるようなインドネシアの議会、政治的民主主義と経済的民主主義への道を照らし出してくれるようなインドネシアの議会、それを拒否するならば、もちろんわれわれは無政府主義者である。もちろんそうである。もし、イギリス人がイギリス議会の議席を拒否するなら、彼は無政府主義者であるといえるであろう。しかし、もし彼らが、彼らの国に足枷をはめている国の議会の議席を拒否するなら——もし、われわれインドネシア民族がオランダ議会に席を占めることを原則として拒絶するならば——それは、無政府主義ではなくて、もっとも激しい民族主義的非協力者の、その闘争原則なのである！

他の諸国での非協力闘争の歴史を見よ。

たとえば、アイルランドの非協力の歴史を見よ。——それは非協力闘争のひとつの源泉である。その地の“シン・フェイン”党の活動を見よ。“シン・フェイン”とは彼らのスローガンであって、それは“わ

れわれ自身” という意味である。

“われわれ自身” / それこそ彼らの政策を描き出したものである。イギリス人とは協働しないという政策、イギリス人と協力しないという政策、イギリス国会に加わらないという政策、それを描き出したものである。“ウェストミンスターへ入るな。ウェストミンスターを去れ。自らのウェストミンスターを築け”これがシン・フェイン党の宣伝と行動であった。その彼らは無政府主義者であろうか。彼らは無政府主義者ではなく、原則的な非協力民族主義者である。われわれの非協力もまた、原則的な非協力でなければならない。

(支配者)との対立政策、対抗政策を遂行し、第二院を自らの闘争の宣伝の場とするために、第二院への参加を支持する者がいる。このような政策は行なわれてもよい。事実、オランダ独立社会党、共産党などの左派勢力はしばしばこの政策を行なってきた。インドの C. R. ダス派もイギリス議会に反対していない。しかし、そのような政策は非協力民族主義者によって行なわれてはならない。ある非協力民族主義者が、支配者の議会に連なった瞬間、然り、彼がオランダ第二院であろうと、民族連合であろうと、その支配者の議会への参加を原則としてよしとした瞬間、まさにその瞬間に、彼は、支配者と自らの仲間との間には、利害対立があるという確信に基礎をおく大原則を、投げうつことになるのである。その瞬間に、彼は原則的な政策を遂行し、本質的に非協力原則を放棄した政策を遂行することになるのである。

われわれは、原則的な非協力政策を遂行しなければならない。——原則的に国民参議会、オランダ議会、民族連合の議席を拒否しなければならない。さらにすでにわたしが明らかにしたように、この議会問題はたんにわれわれの非協力の一側面をなすものにすぎない。非協力のもっとも重要な部分は、人民を教育して、——アイルランドの非協力主義者の言葉を借りれば——人民に“われわれ自身”を信頼せしめ、もっとも激しく力強い大衆行動、マルハエンの権力形成を組織すべく運動させていくことである。⁵¹⁾

(注) 会議に加わらず、あるいは、政庁で働かない人(たとえば、肉スープ売り)すべてが、“非協力”の人だというのではない。(スカルノ)

スカルノがアイルランドのシン・フェイン党を、オランダとインドネシアの関係になぞらえたことに対して、ハッタはイギリス王国とアイルランドの歴史的関係から説きおこして、アイルランド出身の国会議員はつねにアイルランド人民から選出されていたが、ウェストミンスター(国会)での評決でつねに少数派となりそのためイギリスの抑圧を受けたその結果として、彼らは、シン・フェイン(われわれ自身)なる自決政策にふみ切ったのであり、それは「現実政治」の理解に立った行動であったと述べた。⁵²⁾ この「現実政治」(Realpolitik)とは、ハッタ、シャフリルがつとに主張してやまない、彼らの認識の基点であった。

「ハッタ君への解答」の中で、スカルノはこれに答えて次のように言っている。しかし、ここではスカルノ独自の議論が、ハッタの指摘とは関係なしに展開されていく。

「……まさにハッタ君の言う通りだ。アイルランド人民は、つねに評決に敗れた。彼らは、採決で敗れつづけた。彼らは、いつも、イギリス資本家に抑圧され、弾圧された。しかし、ただそれだけによって、彼らは“シン・フェイン”を樹立したのではない。ただそれだけの理由で、彼らは“われわれ自身”を樹立したのではない。彼らが“われわれ自身”を樹立し、“われわれ自身”の政策を遂行したのは、何よりもまず、アイルランド独立の魂を教え授けんとしたからである。彼らが“われわれ自身”を樹立し、“わ

51) Sukarno, *op. cit.*, pp. 189-191, 291-293.

52) *Ibid.*, pp. 209-210.

われわれ自身”の政策を遂行したのは、独立した生活に必須の物質的精神的諸条件を十全なものたらしめんがためであった。彼らが“われわれ自身”を樹立し、“われわれ自身”の政策を遂行したのは、たんに彼らがつねに採決に敗れつづける議会を退去するといった消極的な願望のためではなく、何よりもまず人民の心身を教育せんとする積極的な意欲のためであった。⁵³⁾

スカルノは、続けて、シン・フェイン党の指導者 Arthur Griffith がアイルランドの民衆に対して行なった愛国的な宣伝（イギリスを忘れ、イギリスと袂別し、アイルランドの美しい田園を讃美せよ。）を紹介したのち、こう述べる。

「……それゆえ、モハマッド・ハッタ君が、“シン・フェイン”党の政策をただ“現実政治”としてしかみないなら、それはきわめて罪深いことである。

もっともハッタ君は近頃“現実政治”を愛好してやまない。いうまでもなくハッタ君はわれわれのことを、“感傷と感情とでしかものを見ず、現実政治に基礎をおいていない”と非難している。もちろん、ハッタ君の立論は、“インドネシアの使節”紙上で、自ら“現実政治家”と名乗る者（ジャフリルのことか？—スカルノ）によって強力に弁護されている。

現実政治とは現実政治のことである。それではわたしはハッタ君に質問しよう。アイルランドがウェストミンスター議会でたえず採決に敗れ、まったくイギリスによって敗北せしめられているなら、デン・ハーグの議会で、インドネシアはますますもって、まったくオランダに打ち負かされてしまうのではないのか。もしも、アイルランドが彼ら自身の議席をもち、選挙権と被選挙権を有し、消極的にも積極的にも参政権を有している、そのウェストミンスターをボイコットしたならば、われわれインドネシア民族は、ますますもって、デン・ハーグの議会をボイコットすべきではないのか。そこでは、われわれは、被選挙権はあっても選挙権はない。つまり、消極的な参政権しか有していないのである。さらにまたアイルランド民族が100議席以上も占めているウェストミンスター議会に連なることを快しとしないならば、ハッタ君——現実政治は現実政治であるというハッタ君——、その他数人のラディカル派とたかだか数議席しか占めないようなデン・ハーグの議会を、ハッタ君はボイコットすべきではないのか。⁵⁴⁾

このあとで「議会で政府を打倒し、大臣を罷免することができる」というハッタの主張に触れ、もしそうならば、アイルランドが議会を退いて“シン・フェイン”活動をすることは許されないのかと述べ、続けて、

「さらにまた、デン・ハーグ議会で政府の失脚、大臣の罷免、オランダ諸内閣の粉砕、これらすべては、インドネシアが独立することをまったく意味していない。デン・ハーグの議会で政府が失脚するのは、現存の政府組織がこわれることにすぎない。インドネシアがオランダの“運命の籠”である限り、インドネシアが“オランダがそれに乗って漂流する、そのコルク”である限り、“インドネシアが独立したら、オランダは破産する”と言われてる限り、まさにこのような状態が続く限りは、インドネシアの独立は、オランダのあれこれの政権の興亡に依存しえないし、デン・ハーグの議会で大臣の就任や罷免にも依存しえないのである。このような状態である限り“現実政治”に従えば、われわれインドネシア民族にとって、オランダ第二院の議席はただの第二院の議席そのものにしか過ぎないのである。

そうではないのだ。いかなる国家であれ、いかなる民族であれ、国家の独立というものは——したがって、たんにアイルランドにとってだけではない——その国家や民族の“自主性—シン・フェイン”の程度に依存するのである。……

53) *Ibid.*, p. 210.

54) *Ibid.*, pp. 210-211.

ハッタ君が第二院の候補者となることに同意したのは、“原則において”同意したのである。すなわち、戦術や“方便”として同意したのではなく、その問題の根本、土台において同意したのである。もちろん、このゆえにこそ、われわれはモハマッド・ハッタ君の非協力は、原則的な非協力でもなければ、100パーセント非協力民族主義者に敬意を払う非協力でもないと言ったのである。このゆえにこそ、われわれは、ハッタ君は“すでに、本質的にはその非協力を放棄した”と言ったのである。……

非協調の問題はたんに闘争の問題ではない。非協調の問題はまた闘争原則の問題である。この闘争原則こそ、われわれがあとうかぎり強く握りしめなければならないものである。この闘争原則こそが、非協調民族主義者にデン・ハーグへ行くことを禁ずるのである。……

自らの力をわれわれは築き上げなければならない。自らの力、自らの権力形成をわれわれはもっとも重要視しなければならない。なぜならば、堅忍不拔なインドネシアの権力形成、精神的物質的権力を形成するインドネシアの権力形成、インドネシア人民のただ中でなされる権力形成、ただこのような権力形成によってのみ、われわれは、すべての資本主義と帝国主義とを打倒するために、われわれの声をとどろき渡らせてこれを雷鳴ともなし、われわれの力を強めてこれを地鳴りの力ともなしうるのである。それゆえに再び言う。デン・ハーグの議席を拒否しつづけると……⁵⁵⁾

ハッタは、これに対して、1933年1月30日付の「人民主権」に「再び非協力和第二院について」という一文をよせ、スカルノの批判に答えようとした。上に引用したスカルノの所論と、以下に引用するハッタの所論には、両者の基本的な見解の相違がはっきりと示されている。

「……“非協力和第二院”に関する見解の相違は、原則的であるか非原則的であるかという問題ではなくて、これは各人の体験に関係しているのである。われわれを批判する側の者たちにとって、ドグマ的観点からの非協力は、すでにひとつの形而上学（神秘信仰）となっている。われわれにとって非協力和はひとつの闘争の武器であり、理性的闘争手段であって、それは健全な論理的帰結なのである。……

しばしば政治は文化に関連づけられる。（しかし、ここでは）それはやがてきたるマルハエンの文化と関連づけられるのではなく、滅びゆく古い文化、天国と涅槃とに遊んでいる古い文化に関連づけられているのである。

現在と未来とを变革せんとする政治論が、実にしばしば、かつて一度もおこらなかつたワヤン物語によって修飾されている。歴史性を有しない諸画像が民族的人間（型）の見本とされている。無意識の内に人民は後を振り返るように強いられ、幻想の中で生き死にすることを教えられている。（注）

もしも現在、闘争の諸理論が古代の幻想に基礎をおくならば、それはもはや闘争の武器とはならず、神秘信仰となってしまう。

神話やドグマは闘争の感情を強化せしめても、現実政治について健全な展望を与えることはできない。

われわれにとって、民族闘争の実際の多くは西欧大陸で実施されているものである。われわれ（ハッタのこと一引用者）が余儀なく西欧に11年間いたことがすでに運命を決した。あそこでの闘争を行ないつつ、われわれは西欧人の闘争方式を学びえたのであった。それは、少しの装置があれば、この地のわれわれにも適用しうるものであった。われわれは、西欧人の闘争が、労働者であると資本家であるとを問わず、理性的な基礎に立つものであることを学びえた。

敵を攻撃しこれを弱体化させるために、また宣伝を行なうために、あらゆる場所が利用せしめられていた。彼らは闘争において気ままな感傷や感情でなく、理性と知恵とを用いた。それゆえに彼らはその原則に実際の欲望を良く適合しえたのである。マルクスの『史的唯物論』を読んだ者は誰一人として、その教

55) *Ibid.*, pp. 211-214.

えがもっとも理性的な原則に基づいていることを否定しえないであろう。そのマルクスの教えによれば、戦術は状況に適合しなければならない。マルクスがそう語った時、彼は原則を放棄したのであるであろうか。まったくそうではない。

われわれは、われわれが西欧の理性的精神 (*rationele geest*) によって影響されていることを率直に認める。それゆえにまた、われわれにとって、非協力とはドグマや神秘信仰を意味せず、理性的な闘争方法、理性的な闘争の武器を意味する。われわれのこの確信は、たまたま、教育協会の見解と一致した。それは驚くには当たらない。教育協会の徒は多くが貧困なマルハエンであって、そのため涅槃を夢みるひまさえもないからである。彼らの精神は日々の生活に影響され、また、理性的で単純明快な闘争への考慮によって影響されているからである。

ここで、われわれが西欧人の闘争の性格の正しさをほめていると考えないでほしい。われわれがすでにまったく西欧人となった、あるいは西欧的資質を身につけてしまったと考えてはならない。それとは、はるかに遠いのだ。

われわれが賞讃しているのは、ある目的を達成しようとする際の、西欧人の力の使い方についてのみである。理性的方法がこれである。われわれは西欧人の業欲や貧欲を賞讃しているのではない。それどころか、これについては非難し足りないほどである。かくしてまた、モラルについても、われわれはかつて西欧人のモラルを愛したことはなく、依然として東洋人のモラルを高く評価している。

目下われわれは西洋人から学問を受け入れることを躊躇しない。西欧人の理性的闘争方式の模倣を躊躇するどんな理由があるだろうか。いわんや、われわれが西欧人と闘争するのであるならば、文化と感傷とに狂信的な者は誰でも、西欧人のほうがわれわれより進んでいて、われわれが模倣してもよい多くのことがらがあることを認めたがらない。彼らにとっては、東洋よりすぐれたものはないのである。

マルハエンの運動にとって、もっとも必要なものは理性的な闘争方式である。それゆえ、教育協会が構想する非協力はあそこの徒に対抗するための闘争の武器なのである。第二院は植民地帝国主義に対決するために用いても良い場所である。なぜならば、その場所は原則的に用いるからである。

われわれの非協力政策は、われわれが第二院に立候補するように、独立社会党から要請されたのちはじめて、われわれがいま構想しているような形態をとってあらわれたと言う者がいる。

われわれは、インドネシアの民族運動場裏には、その経験が浅いものがきわめて多いことを知っており、また、拍手喝采することだけを教えられて運動のボスになっていった子供たちがきわめて多いことも知っている。したがって、非協力の立場に立つ者は、第二院の議席を占めようとしたからとてその原則を犯したことはならないと語れば、非協力と第二院との問題はすでに終わっている。つまりもはや問題にはならないことを、われわれは以下に明らかにしておく。

非協力政策に基礎をおくいっさいの集団よりもさらに革命的な一つの集団、すなわち、インドネシア協会は、1929年に、植民地帝国主義と対決して闘うために、第二院に議席を占めることは、非協力の基礎に相反しないという年次方針を決定している。……

……このような戦術は労働者階級一般の利益と結びついていた。帝国主義と資本主義の中心は植民地にある。それゆえ、ヨーロッパの左翼指導者の見解に従えば、植民地資本主義と帝国主義とが、自ら抑圧されている人々の指導者によって国会で滅ぼしうるとしたら、その意義はきわめて大きいことになる。この戦術は、1929年のインドネシア協会によって正しいとされた……。

……ここにはまた、その体験からくる見解の相違がみられる。すなわち、この地の一部の非協力論者の神秘信仰と、旧インドネシア協会派の理性的闘争方式の相違がこれである。……⁵⁶⁾」(下線 引用者)

(注)われわれはワヤンその他が現在なお大部分の民衆の娯楽となっていることを一瞬たりとも忘れてはいない。しかしわれわれは、帝国主義反対の政策がワヤンに結合されることには同意できない。

56) M. Hatta, *op. cit.*, pp. 166-170.

このあとハッタは、現実的政策が感傷にとってかわるのはきわめて困難なことであるが、インドネシア協会自身が、民族的感傷、人種的感傷を次第に脱して理性的闘争方式を採り、その国際的連帯性を獲得していった例をあげて、理性的闘争の必要性を再度強調している。

III 論争の意味

第II節でみてきた両派の論争点を一貫してつらぬいているのは、民族運動の正統性の争い、正統な後継者は誰かという争いであるが、その指導権争いとともに明らかにされてくるのは、スカルノ（的）思考様式とハッタ（ジャフリル）（的）思考様式の基本的な相違点である。1932年当時、スカルノは31才、ハッタは30才、ジャフリルはまだ23才であり、いずれも年若く、政治運動に身を投じてより日も浅かったとはいえ、これら三者とも論争の中で後年まで一貫する思考様式を明確化しつつ、インドネシア現代史上に、各々オピニオン・リーダーとしての地位を確立していった。ここでの論争点は、両派がともにその政治舞台から姿を消した1934年以降においても、ことに、インドネシア的人間像のあり方の問題として、タマン・シスワ民族教育運動や『ブジャンガ・バル』文芸運動の中に混えられ、あるいは、1935年以降両者の間にたたかわされた「文化論争」の中で噴出しつつ、継承されていったと言えよう。

本節では論争の内容とその政治的背景とを再整理しこの論争の意味についてまとめてみたい。

(1) 民族運動継承の正統性をめぐって

国民党の解散問題に端を発したこの論争は、民族運動の正統な後継権をめぐる争いと深くかかわっている。

第I節でみたように、今世紀初頭より始まるインドネシア民族運動の中で、ひとたびはその同盟員100万にも達したと言われるイスラム同盟の中核は、その後、共産党の大衆組織人民同盟として、マルクス主義からであれイスラム的聖戦の観点からであれ、植民地政庁にもっとも急進的に対決した。しかしこの人民同盟も、すでにプリンゴディグドが指摘するように、1927年以降その指導部分を喪失していた。時あたかも、倫理政策の下に育ちつつあった新しいエリートのうち、オランダ留学生集団は、故国インドネシアでの政治活動の場を求めつつあった。これとの関連で1926年末のハッタ＝セマウン協定をみると、それは、インドネシア協会がその活動の対象としたのが何よりも人民同盟であることが理解されよう。インドネシア協会が1927年に、植民地に登場しつつあったスカルノらとともに、むしろスカルノを表面に立てて、国民党を設立したのは、国民党が人民同盟下の民衆を再組織化し、そのことによって、イスラム同盟以来のインドネシア民族運動のその主流を継承せんとする意図のあらわれであった。そして事実、スカルノと国民党は、ただちに民族運動全体にその指導権をうちたてた。

国民党が分裂した時に、どちらが1927年の国民党の精神を正しく継承しているのか、という論争が、まずハッタ、ジャフリル側から挑まれたことは、第Ⅱ節でみた通りである。その際ハッタ、ジャフリルはともに、1927年の国民党の意義とその正統性を、完全に承認している。そして、それは、サルトノ派から分かれた自由派連合とその後身である教育協会こそが、国民党の精神を正しく引き継ぐものであり、その国民党を設立せしめたインドネシア協会以来の民族運動の正当な後継者であるという主張に重なっていくのである。インドネシア協会以来のと言うのは、ハッタ＝セマウン協定に象徴されるような民族運動の指導権の「主権移譲」が、おそらく、ハッタの主張の根底にあるからである。ハッタがオランダ国会第二院への立候補問題に関連して彼の非協力の立場を問いつめられた際に、これは1929年のインドネシア協会の決定であり、もはや議論の必要はないと言い切るのは、民族運動の指導権の継承されていく系譜を、たくましくして明示したものであろう。すなわち、インドネシア協会は共産党から運動の指導権を継承し、その協会が国民党の基本原則を樹立した。したがって協会と国民党の間に活動方針の矛盾がない以上、協会の決定に従うことは国民党を正しく継承することにほかならないという思考経路である。

教育協会が国民党の正当な後継者であるとの主張はまた、教育協会の略号にも示される。教育協会 (Pendidikan Nasional Indonesia) は、その頭文字 PNI に baru (新しい) をつけて PNI-baru と自ら略称していたことは先に述べたが、ここに baru を付して、国民党 (Partai Nasional Indonesia) の PNI と区別したとはいえ、PNI-baru と自ら名乗る際の PNI に彼らがこめてるのは、たんに教育協会の略号ではなくて国民党そのものである。

こうしてみると、ハッタ、ジャフリルらが、はじめはサルトノ (彼もかつてインドネシア協会に所属していた) に対し、後にはスカルノに対して、彼らの正統性を主張するのは、もっぱら、その指導権の継承についてであるかのように見える。しかし、1930年代前半に、教育協会がたとえいかにその指導権の正統性を主張したとはいえ、それはしょせん、あそこの地のライデンでセマウンとハッタとの間に交された一片の「協定書」に記されただけのことであり、この地での独立運動をどのように再組織し強化するのかという問題とは別のレベルの問題である。したがって、ハッタ、ジャフリルが、わずか1,000名内外の教育協会に拠ってなお自らの正当性を主張したのは、たんに指導権の正統性についてでなく、彼らがインドネシアへ持ち込もうとする新たな指導理念への自信からであった。

11年間オランダにあって、西欧社会を知悉し、その間西欧諸思想 (ことに社会主義思想とその運動) をわがものとしていたハッタや「子供の頃から夢にみ、あこがれ続けたオランダを実際に目にして想像と寸分たがわぬ⁵⁷⁾」ことにわが意を得「そこがわが家であるかのように感

57) S. Sjahrir, (Sjahlrazed) *Renungan Indonesia* (インドネシア瞑想録), Djakarta, 1947, p. 163.

このジャフリルの手記 (オランダ語) の原題は, Sjahlrazad, *Indonesische Overpeinzingen*, 1945. インドネシア語訳は, H. B. ヤシンによってなされている。

じ⁵⁸⁾」、のちオランダ人共産党員の妻を伴って帰国するジャフリルは、彼らの抱く社会認識と指導理念とに完全な自信をもち、それをインドネシア社会の中に確立することに激しい使命感をもやしていたのであり、その使命感こそが彼らに民族運動の指導権の正統性を主張させえたのである。その指導理念は、第Ⅱ節で示されるように感傷や感情を排して理性的な現実認識に徹すること、民衆をワヤン物語や古代の王の栄光の物語の中にまどろませることを排して、世界史の現実にもとづいて彼らを啓蒙していくこと等として、主張されるものである。このハッタの主張は、1932年に彼が記した「インドネシア独立をめざして」(Kearah Indonesia Merdeka)——この論文は教育協会の組織宣言とされている——の中でもっとも集約的になされている。

それでは、ハッタらが自らの指導理念を主張する際にその批判の対象となるスカルノは、この時期に何を主張していたのか。スカルノが1933年に記し、これもインドネシア党の党宣言とされている、「インドネシア独立の達成のために」の中には、1930年の法廷弁説以来1933年夏に再び逮捕されるにいたる時期のスカルノの主張が集約されている。

この二つのマニフェストを検討して、スカルノとハッタの民族思想、両者の基本的相違を整理してみたい。この二つの論文はいずれも長文であり、詳細に検討すればもっと別の問題点が出てくると思われるが、ここでは本稿全体との関連で、両者の相違に注目して、項目的に整理するにとどめたい。

(2) スカルノとハッタ

この二つの論文の中では、スカルノもハッタも、独立インドネシアをめざして民族主義を掲げ、独立インドネシアが民主主義（政治的にも経済的にも民主主義的であること。これをスカルノは社会＝民主主義と呼んで、経済的平等性を主張する。）を原理とすべきこと、そのために、民衆を教育してこれを組織すること、を等しく強調している。

それにもかかわらず、第Ⅱ節でみたように両者は激しく対立し、事実、論争中では決定的に異質な点がむき出しにされてさえいる。この異質性について、筆者はさきに「スカルノの研究」の序論的な考察を試みた際に、項目的に整理してみた。その際、スカルノの闘争原則として、独立至上主義、オランダの全称否定、進歩法則の信奉をあげた。そして30年代初頭のこの論争の中では、これらの原則にたちつつ、スカルノが、彼の歴史哲学を明示し、またマルハエニズムという概念を定着させつつ、その語りかけの対象を都市知識人階層（いわば仲間うち）から、次第に農村（デサ）社会へと移行させていく過程としてとらえてみた。⁵⁹⁾ 以下、それを再説する形で、スカルノとハッタの異質性、両者の対抗基軸についてまとめてみたい。

58) *Ibid.*, p. 163.

59) 土屋健治「スカルノの研究」『東南アジア研究』1971, 8巻4号, pp. 566-579.

1) 民族観

両者がともに、インドネシアの独立を民族運動の当面の最大最高目標としていることは変わりはない。しかし同時に独立後の社会がいかなる社会であるべきかについても、両者はともに重要視している。その重要視の仕方は、ともにフランス革命の例をひき合いに出して、フランス革命が達成しえなかった経済的平等性に注目するという形で示され、ともに「社会主義」を独立後のインドネシアの目標として掲げるのである。その限りでは、当面最大の目標である独立も、ひとつの橋にしかすぎない。しかし、その橋の彼方を重視するか、その橋そのものを重視するかで、ハッタ（派）とスカルノ（派）とは異なっている。教育協会派が掲げる「人民主権」思想は、ハッタが解説しているように、今日の運動において重要なだけでなく、きたるべき日々においてこそ、国家の基本原則となるものであって、それゆえに「人民主権」思想を教育によってひろめていく必要があるのである。一方スカルノはこの論文の中で、独立を「黄金の橋⁶⁰⁾」だと言っている。橋には違いないが、それは黄金なのである。したがってスカルノにとって、何よりも重要なのは、この橋に至るための「民族の魂」を鍛えていくことである。スカルノの「民族の魂」は、のちに“ゴトン・ロヨン”（相互扶助精神）として定立される。（スカルノは、1933年のこの論文の最後に“ゴトン・ロヨン”という言葉をはじめて使っているが⁶¹⁾、この時点ではまだ、それは「民族の魂」そのものとして意識されてはいないようである。）ハッタ（およびジャフリル）は「民族の魂」とは言わない。その代りに「人民主権」を「民族の魂」の具体的内容としてもっぱら強調している。

独立至上主義は、この時期の論文にみられる限りでは、スカルノのほうにより強く示されているといえよう。この点は、実は民族主義と主張されている場合の民族そのものとのとらえ方とも関係してくる。ハッタ論文の冒頭で民族主義が語られる時、それは国際主義との対比で語られる。民主主義を語る時、ハッタはモンテスキュー以来の西欧民主主義の発展史から説きおこして、教育協会の標榜する民主主義の主張へとつないでいく。⁶²⁾

スカルノの論文は、インドネシア史そのものについて、栄光の過去→悲惨な現在→約束にみちた未来、という図式で貫かれている。民族は、スカルノにあってはインドネシア民族そのものにほかならない。しかし、ハッタには、民族一般が抽象され「帝国主義と被抑圧諸民族」の理論を経由して、インドネシア民族へ回帰するという形がみられる。したがって、ハッタらにあっては、民族としてのインドネシア民族はいわばその理論的前提として存在するものである。PPPKIをめぐるハッタらの主張の一つの根拠をなす民族統一論は、このことと無関係ではないであろう。

60) Sukarno, *op. cit.*, p. 314.

61) *Ibid.*, p. 322.

62) M. Hatta, *op. cit.*, pp. 61-74.

2) 対オランダ観

民族独立を至上目標とするスカルノは、民族内の統一と団結を主張し続けるが、これは植民地支配民族（オランダ）と、被支配民族（インドネシア）との絶対的背反関係として措定される。スカルノはこれを「あそこ」(sana)と「ここ」(sini)との非和解的対立としてとらえている。「インドネシア独立の達成のために」というこの長い論文は「あそこ」と「ここ」との絶対的背反関係を強調することに貫かれている。「あそこ」の全称否定の根底にあるのは「白人の責務」論（倫理政策の精神）の否定である。もし白人がその高い文化を授けるべき責務にかられていたなら、なぜ、インドやインドネシアのような高い文明をもつ民衆の所へ先にきて、北極のエスキモー種族の所へ行かなかったのか⁶³⁾、とスカルノは激しい感情をぶつけている。「あそこ」が「ここ」の眼前から消えぬ限り、両者は復活の時にいたっても、獅子とその餌食のように向かいあうのみである。⁶⁴⁾

スカルノのいう「あそこ」と「ここ」とは、彼岸と此岸ともいうべきものであり、「此岸にありしわれら」へスカルノは強烈に自己を一体化せしめんとする。それゆえ PPPKI と非協力政策とはスカルノ自身の影にほかならない。

一方、ハッタやシャフリルが理性的な現実認識をと主張するとき、それが西欧的合理主義を主張していることは明らかである。非協力問題をめぐるハッタの解答中に示されている彼の西欧観は、そのことを明瞭に物語っている。ハッタやシャフリルはオランダ社会も一つでないことを状況認識の基点にすえ、それによってオランダと向かい合い、オランダに対する自らの主体をオランダ人と対等の立場——西欧文物に対する対等の理解能力、相互に理解可能な思考経路・論理構造——で主張する。そしてこの立場（西欧的思考様式）こそ、彼らが祖国へ持ち込もうとしたものであり、彼らが「新しい」国民党（＝民族運動）の指導理念にせしめんとしたものであろう。

後年、ハッタとシャフリルは西イリアンからさらにバンダ島へと流されるが、そのバンダネィラでシャフリルが綴った手記の中には、彼（ら）の思考様式が余すところなく示されている。シャフリルにとって、バンダネィラは西欧派インテリゲンツィアの心象風景として映し出される。その地のいわばコスモポリタンの性格こそは、シャフリルの普遍性の中では、インドネシアのどこの地にもまして「心やすらぐ」ものなのである。⁶⁵⁾ そのシャフリルが1938年3月7日に記した手記のうち、彼のハッタ理解を示す部分を引用してみたい。これはハッタへの讃辞である。

63) Sukarno, *op. cit.*, p. 276.

64) *Ibid.*, p. 290.

65) S. Sjahrir, *Renungan Indonesia*, p. 92, p. 102, pp. 112-115, pp. 149-152, 164 等に、シャフリルの非インドネシア的バンダ社会への親近感が吐露されている。

「……かつて、ハフィル（ハッタ）は非協力者ではあったが、心の中では、多くの点で植民地政庁を信頼していた。という意味は、彼が政庁支配の高い道義性と人道性を信じていたということである。事実それは近代的民主的な政府であった。……」

基本的には彼は、彼が敵対している当の植民地支配方式とその礼儀正しさを高く買っていた。いまや、彼も何よりもディグールでの体験を経て、その考えは変わってしまった。いま彼はかつてのような烈しい非協力主義者ではない。しかし、道義的側面から見れば、彼はかつては今以上に協力者であっただろう。なぜならば、かつては彼は政庁の正義と礼儀正しさについては無意識のうちにこれを信頼して、政庁に立ち向かったからである。だから彼は、無意識のうちに、たとえばタムリンのような“協力者”に比べて、はるかに植民地支配者を信頼していたであろう。

わたし自身もまたそうであった。かつてわれわれは政庁非難の宣伝を行なったが、われわれは心の底では、政庁を信頼しその道義性を信じていたことを、気づかなかったのである。ハフィルは一時期、流刑されるなんて信じたくないようであったし、ディグール行きなどは夢にも思っていなかった……。

ハフィルは、(流刑地ディグールで)目を開いた。彼はヨーロッパでの何年間かの“政治的生活”にもまして多くのことを学んだ。……

(多くの協力者が表面のみ政庁に従い、心の中はまったく別であったのに対し)非協力派は植民地支配者を高く評価していたから、彼ら非協力者は、法律の枠さえ越えなければ、その主張が政庁にとっていかに不快であろうとも、政庁は彼らの武士道的な率直明快な態度を放任しておくに違いないと感じていた。

植民地政庁の人道主義と民主主義的感情に対する大きな信頼は、ハフィルにあってはきわめて強烈であった。その論文の中では、彼は植民地の状態を非難攻撃した。彼は政庁の善意の目的を信じなかったし、人民の状態を改善して大人の民族となるために、政庁との共同行動が可能であるとも信じていなかった。しかし心の中は、彼はオランダ人であった。という意味は、彼は植民地支配者を、心の底から外国人であり、また、敵であるとみなしていたのではなくて、たとえば、オランダ政府に対決する際の左翼社会主義者のような見方で植民地支配者をみていたのである。したがって、無意識のうちに、彼は多くの同一の基準を用いていた。無意識のうちに、彼はひとつの同じ土台——主要な土台——を認めていた。それは、政庁の人道主義的方法と民主主義的方法に対する信頼であり、それを、公式には、信じえないと述べたのである。……⁶⁶⁾」(下線 引用者)

ここでシャフリルが率直明快に述べているように、ハッタにとって「話しの通ずる」のはオランダ人であり、したがって、オランダ議会の候補者に擬せられることを、ハッタは「名誉なことだとみなした」のであった。⁶⁷⁾ その「名誉なこと」をスカルノは *sini-sana* 論の中で、ほとんど許すべからざることとして批判し、一方ハッタにとってみても、スカルノの「生命の一部」である PPPKI は *persatéan* にほかならず、また「インドネシア民族の魂」をうたい上げるスカルノとそれに酔いしれる民衆とは *membébék* (あひるの行列) 的風景にほかならないので、これまた許すべからざることなのであった。おそらくそこでは両者は、すでに感情的に相互に決して理解できない地点にいることを、認めざるを得なかったであろう。

PPPKI を統一戦線の問題として論じていたハッタとシャフリルは、ともに、統一戦線は運動が危機に直面した時のみ必要でありかつ有効であると主張していた。その彼らが民族運動の

66) *Ibid.*, pp. 174-175.

67) Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 161.

統一を呼びかけたのは、第二次大戦の前夜であり、その時の彼らの危機意識はファシズムに対する民主主義の危機意識であった。⁶⁸⁾ 今世紀初頭、倫理政策の採用にあたって、フルフローニェは、西欧思想の注入による、こことあそこの強固な精神的一体性の実現を構想していた。40年近い歳月を隔てて、ハッタ、シャフリルらはこの構想にもっとも純粋な形でこたえたとも言えるが、その構想に対するこだまは、はるか流刑地バンダネィラから、かすかに響いてきたに過ぎなかった。1930年代初頭に、シャフリルが教育協会の具体的任務を端的に“*Aufklärung*”であると言った時、かつてフルフローニェの立っていた場所を、インドネシア人シャフリルが襲ったことになる。そのシャフリルが、孤島にあってオランダ民主主義防衛を叫んだ時、現実のマルハエンは、「あそこ」と「ここ」とが決定的に袂別することの期待にみちていたのであり、そのことはバンダでシャフリル自身も確認していた。⁶⁹⁾ それはシャフリルに、彼とマルハエンとの距離の遠さをしみじみと感じさせるものであったが、同時にまた、教育協会以来のハッタ、シャフリルらが「人民主権」概念に託したインドネシア近代化の道がなお遠いという彼らの感慨と重なっていたのである。

3) マルハエニズム

マルハエンという言葉は、この論文中、両派が共通して頻繁に用いているものである。西ジャワの貧しい独立自営農民の名にちなんでつけられたというこの言葉が最初に出てくるのは、1930年のスカルノの法廷弁説中であるが、そこではクロモ (*kromo*) の民と並称されるに留まっている。スカルノ出獄後、マルハエン (主義) はインドネシア党によって好んで用いられるが、ハッタ、シャフリルらもしばしば用いている。

スカルノ自身は自らマルハエンという言葉をつくり出した後、この時期、もっぱらマルハエンの統一とその戦線強化を主張している。この時期に、スカルノは PPPKI 内での活動を中断してはいないが、論文の中で PPPKI について触れることはほとんどない。スカルノ自身は、1927年～29年に PPPKI に託したものを、今度はマルハエン主義に託そうとしている。スカルノによる (そしてインドネシア党の決定による) マルハエンの定義に従えば、マルハエンとは、インドネシアのプロレタリアートと貧農、その他のインドネシアの貧しい人々をさし、マルハエン主義とは、社会=民族主義および社会=民主主義のことである。⁷⁰⁾ マルハエンは *Rakjat* や *Kromo* にかわる「インドネシア的人民概念」であり、この「人民概念」は教育協会派によっても共有されるのである。マルハエンの定義によれば、マルハエンの中核をなすのはプロレタリアートであるが、スカルノ自身の意識の中にあるのは、インドネシア民族の大部分を占めている農民であり、そのことは、1933年論文 (「インドネシア独立の達成のために」)

68) S. Sjahrir, *Renungan Indonesia*, pp. 103, 121, 129-133, 161-163, 168-169, 177-183.

69) *Ibid.*, pp. 162-163.

70) Sukarno, *op. cit.*, p. 253.

中でくりかえし述べられている。1927年当時のスカルノは民族統一を政治的思想と政治勢力の統一として提示した。マルハエン主義は民族統一をインドネシア社会の構造的関係においてとらえようとしたものであろう。

ハッタやジャフリルとスカルノとの間に、このマルハエンをめぐる論争はみられないが、ハッタが慣習法学者 フェン・ホーレンホーフェンの示したインドネシア村落の特徴の中で村落（デサ）の抵抗権、話し合い精神、相互扶助精神（*tolong-menolong*）の三つをとりあげ、これらは将来の民主的インドネシア社会の基礎にしようのものであると、教育協会の宣言（1932年論文）で述べている⁷¹⁾のは、ハッタの共同組合論およびブーケのインドネシア村落論との関係で、さらに検討すべきであるが、本稿ではその指摘にとどめておく。

本稿でみてきたように、ハッタ、ジャフリルらの立場は、ベルンハルド・ダームが指摘しているように「ヨーロッパ的」であり、教育協会そのものも「ヨーロッパ的」な党である。⁷²⁾ これとの対比でいえば、スカルノとその党とはインドネシア的、民族的ということになるが、ここにインドネシア的とは何かという設問に対しては、さらに検討していきたい。

なお、本稿ではハッタとジャフリルの相違については捨象した。後年の流刑地で、スカルノ、ハッタ、ジャフリルらはさらにその性格を鮮明にしていくのであり、ハッタとジャフリルとの異同は、その時点ではじめて問題にされうると考えられるからである。

なおまた、本稿では略記されるに留まったマルハエン（主義）の問題は、スカルノ、ハッタのこの時期の国際情勢の認識の仕方の問題（とくにインドとの関係）とともに、後日を期したい。

71) M. Hatta, *op. cit.*, pp. 75-76.

72) Bernhard Dahm, *op. cit.*, p. 142.